

10
平凡茶筌髮他

朝日文庫

平凡・茶筌髮他

二葉亭四迷

解題 中村光夫



朝日新聞社刊

朝日文庫発刊の辭

朝日文庫は朝日新聞創刊七十周年を記念する事業の一として發足するものである。凡そ文化方面に重点をおく日本の再建は先ず過去の文化に対する反省から始めなければならぬ。殊に我が知識人にとつて維新以來の争鬭を冷靜に再検討して見るものが何より肝要である。朝日新聞社としてもまた自らの七十年に渉る足跡を回顧し、その實てた人物の文庫的業績、並びにかつて紙面を飾つた各段の文獻のうちから、苟くも不朽の生命を保つもの、なお十分に現代的意義をもつものなどを採ひ、これに新裝を施して世に問ふことは、当然なすべき時務の一であると考えらる。

それは單なる復古趣味や空疎な自貢に基くものでない。朝日新聞が過去において、自らの光輝ある傳統を守りながら、あくまで進歩的な言論文章を以て、我國文壇の發展、恩潮の醇化に貢獻して來た努力の結晶は、そのまま移して以て明日の日本建設への礎石となることを確信するがために外ならない。

朝日文庫は巻を重ねるに従つて、漸次その範圍を選心的に拡げて行く計画をもつものである。

昭和二十四年十月

朝日新聞社

平 凡・茶 筍 髪 他 (朝日文庫1) 編 者 中 村 光 夫

昭和24年10月25日印刷 昭和24年10月80日發行 定 價 200 圓

印刷兼發行者 東京都千代田区有樂町朝日新聞社 杉 山 胤 太 郎

發行所 東京都丸の内・大阪市中之島・小倉市砂津 朝 日 新 聞 社

(電話丸の内131・北浜131・小倉2731)

目次

平凡	一
ひとりごと	一五七
昨今のウキツテ	一六六
其後のウキツテ	一七五
入露記	一八九
露都雜記	二〇一
茶筌髪	二〇七
未亡人と人道問題	二四一

茶筌髮人物（手帳十五より）	二四七
茶筌髮梗概（手帳十六より）	二五四
嫉妬する夫の手記	二八〇
解題（中村光夫）	三〇〇

小說
平
凡

一

私は今年三十九になる。人世五十が通相場なら、まだ今日明日穴へ入らうとも思はぬが、しかし未來は長いやうでも短いものだ。過去つて了へば實に呆氣ない。まだくと云つてる中にいつしか此世の隙が明いて、もうおさらばといふ時節が来る。其時になつて幾ら足掻いたつて藻掻いたつて追付かない。覺悟をするなら今の中だ。

いや、しかし私も老込んだ。三十九には老込みやうがチト早過ぎるといふ人も有らうが、氣の持方は年よりも老けた方が好い。それだと無難だ。

如何して此様な老人じみた心持になつたものか知らぬが、強ち苦勞をして來た所爲では有るまい。私位の苦勞は誰でもしてゐる。尤も苦勞しても一向苦勞に負けぬ何時迄も元氣な人もある。或は苦勞が上^すまりをして心に浸みないやうに、何時迄も稚氣の失せぬお坊さん質の人もあるが、大抵は皆私のやうに苦勞に負けて、年よりは老込んで、意久地なく所帯染みて了ひ、役所の歸り

に鮭^{しやけ}を二切竹の皮に包むで提げて来る氣になる、それが普通だと、まあ、思つて自ら慰めてゐる。もう斯うなると前途が見え透^すく。もう如何^{どん}様に藻掻^なたとて駄目だと思ふ。残念と思はぬではないが、思つたとて仕方がない。それよりは其際^{ひま}で内職の賃譯の一枚も餘計にして、もう、これ、冬が近いから、家内中に綿入れの一枚も引張らせる算段を爲なければならぬ。

もう私^{わたし}は大した慾もない。どうか忤^{たが}が中學を卒業する迄首尾よく役所を勤めて居たい、其迄に小金の少しも溜めて、いつ何時^{なんど}私に如何^{どん}な事が有つても、妻子が路頭に迷はぬ程にして置きたいと思ふだけだが、それが果して出来るものやら、出来ぬものやら、甚だ覺束ないので心細い……が、考へると、昔は斯うではなかつた。人並に血氣^{さかん}は壯^{さかん}だつたから、我より先に生れた者が、十年二十年世の鹽を踏むと、百人が九十九人まで、皆じめくゝと所帯染みて了^{しま}ふのを見て、意久地の無い奴等だ。そんな平凡な生活をする位なら、寧^いそ首でも縊^くつて死^ち了^{しま}へ、などゝ蔭では嘲^{あざわら}けつたものだつたが、嘲^{あざわら}けつてゐる中に、自分もいつしか所帯染みて、人に嘲^{あざわら}けられる身の上になつて了つた。

かうなつて見ると、浮世は夢の如しとは能く言つたものだと思^{おも}ふ。成程人の一生は夢で、而も夢中に夢とは思はない、覺めて後^{その}其と氣が附く。氣が附いた時には、夢はもう我を去つて、千里萬里を相隔てゐる。もう如何する事も出来ぬ。

もう十年早く氣が附いたらとは誰しも思ふ所だらうが、皆判で捺したやうに、十年後れて氣が附く。人生は斯うしたものだから、今私共を嗤ふ青年達も、聽ては矢張り同じ様に、後の青年達に嗤はれて、殘念がつて穴に入る事だらうと思ふと、私は何となく人間といふものが、果敢ないやうな、味氣ないやうな、妙な氣がして、泣きたくなる……

あッ、はッ、は！……いや、しかし、私も老込んだ。こんな愚癡が出る所を見ると、愈老込んだに違ひない。

二

老込んだ證據には、近頃は少し暇だと直ぐ過去を憶出す。いや憶出しても一向憶出し榮のせぬ過去で、何一つ仕出來した事もない、どころぢやない、皆碌でもない事ばかりだ。が、それでゐて、其失敗の過去が、私に取つては何處か床しい處がある、後悔慚愧腸を斷つ想が有りながら、それでゐて何となく心を惹付けられる。

日曜に妻子を親類へ無沙汰見舞に遣つた跡で、長火鉢の側で徒然としてゐると、半生の悔しかつた事、悲しかつた事、乃至嬉しかつた事が、玩具のカレードスコープを見るやうに、紛々と目まぐるしく心の上面を過ぎて行く。初は面白半分に目を瞞つて之に對つてゐる中に、いつしか魂

が藻脱けて其中へ紛れ込んだやうに、恍惚として暫く夢現の境を迷つてゐると、

「今日は！ 榊屋でございます！」

と、ツイ障子一重其處の臺所口で、頓狂な酒屋の御用の聲がする。これで、私は夢の覺めたやうな面になる。で、ぼやけた聲で、

「まづ好かつたよ。」

酒屋の御用を逐返してから、おい、斯うしてもゐられん、と獨言を言つて、机を持出して、生計の足しの安翻譯を始める。外國の貯蓄銀行の條例か何ぞに、絞つたら水の出さうな頭を散々悩ませつゝ、一枚二枚は餘處目を振らず一心に筆を運ぶが、其中に曖昧な處に出會してグツと詰ると、まづ一服と舊式の烟管を取上げる。と、又忽然として懐かしい昔が眼前に浮ぶから、不覺其に現を脱かし、肝腎の翻譯がお留守になつて、晩迄に二十枚は仕上げる積の所を、十枚も出来ぬ事が折々ある。

かうどうも昔ばかりを憶出してゐた日には、内職の邪魔になるばかりで、卑しいやうだが、錢にならぬ。寧ろそのくされ、思ふ存分書いて見よか、と思つたのは先達ての事だつたが、其後——矢張り書く時節が到来したのだ——内職の賃譯が弗と途切れた。此暇を遊んで暮すは勿體ない。私は兎に角書いて見よう。

實は、極く内々の話だが、今でこそ私は腰辨當と人の數にも算まへられぬ果敢ない身の上だが、昔は是れでも何の某といや、或るサークルでは一寸名の知れた文士だつた。流石に今でも文壇に昔馴染が無いでもない。恥を忍んで泣付いて行つたら、随分一肩入れて、原稿を何處かの本屋へ嫁けて、若干かに仕て呉れる人が無いとは限らぬ。さうすりや、今年の暮は去年のやうな事もあるまい。何も可愛い妻子の爲だ。私は兎に角書いて見よう。

さて、題だが……題は何としよう？ 此奴には昔から附倦んだものだツけ……と思案の末、確と膝を拊つて、平凡！ 平凡に、限る。平凡な者が平凡な筆で、平凡な半生を叙するに、平凡といふ題は動かぬ所だ、と題が極る。

次には書方だが、これは工夫するものはない。近頃は自然主義とか云つて、何でも作者の経験した愚にも附かぬ事を、聊かも技巧を加へず、有の儘に、だら／＼と、牛の涎のやうに書くのが流行るさうだ。好い事が流行る。私も矢張り其で行く。

で、題は「平凡」、書方は牛の涎。

さあ、是からが本文だが、此處らで回を改めたが好からうと思ふ。

私は地方生れた。戸籍を並べても仕方がないから、唯某縣の某市として置く。其處で生れて其處で育つたのだ。

子供の時分の事は最う大抵忘れて了つたが、不思議なもので、覚えてゐる事だと、判然と昨日の事のやうに想はれる事もある。中にも是ばかりは一生目の底に染付いて忘れられまいと思ふのは、十の時死別れた祖母の面だ。

今でも目を瞑ると、直ぐ顯然と目の前に浮ぶ。面長の、老人だから無論皺は寄つてゐたが、締つた口元で、段鼻で、なか／＼上品な面相だつたが、眼が大きな眼で、女には強過る程權が有つて、古屋の——これが私の家の姓だ——古屋の隱居の眼といつたら、随分評判の眼だつたさうだ。成程然ういへば、何か氣に入らぬ事が有つて祖母が白眼でジロリと睨むと、子供心にも何だか無氣味だつたやうな覺がまだ有る。

大抵の人は氣象が眼へ出ると云ふ。祖母が矢張り其だつた。全く眼色のやうな氣象で、勝氣で、鋭くて、能く何かに氣の附く、口も八丁手も八丁といふ、一口に言へば男勝り……まあ、さういつた質の人だつたさうな、——私は子供の事で一向夢中だつたが。

生長後親類などの話で聞くと、それといふが幾分か境遇の然らしめた所も有つたらしい——といふのは、早く祖父に死なれて若い時から後家を徹して來た。後家といふ者はいつの世でも兎角

人に影口言れ勝の、割の悪いものだから、勝氣の祖母はこれが悔しくて堪らない。それで、何の、女でこそあれ、と氣を張る。氣を張て油斷をしなかつたから、一生人に後指を差されるやうな過失はなかつた代り、餘り人に愛しもされずに年を取つて了つて、父の代となつた。

父は祖母とは全で違つてゐた。如何して此人の腹に此様な人がと怪しまれる程の好人物で、面も薩張り似てゐなかつた。大きな、笑ふと目元に小皺の寄る、豊頬した如何にも愛嬌のある圓顔で、形も大柄だつたが、何處か圓味が有り、心も其通り角が無かつた。快活で、蟠りがなくて、話が好きで、碁が好きで、暇さへ有れば近所を打ち歩き、大きな噓を自慢にする程の罪のない人だつた。祖父が矢張然うであつたと云ふから、大方其氣象を受繼いだのであらう。

父は此様な人だし、母は——私の子供の時分の母は、手拭を姉様冠りにして襷掛けで能くクレクレ働く人だつた。其頃の事を誰に聞いても、皆阿母さんは能く辛抱なすつたとばかりで、其他に何も言はぬから、私の記憶に残る其時分の母は、何時迄經つても矢張り手拭を姉様冠りにして、襷掛けで能くクレクレ働く人で、格別如何いふ人といふ事もない。

斯ういふ家庭だつたから、自然祖母が一家の實權を握つてゐた。家内中の事一から十迄祖母の方寸に捌かれて、母は下女か何ぞの様に逐使はれる。父も一向家事には關係しないで、形式的に相談を受ければ、好うがせう、とばかり言つてゐる。然う言つてゐないと、祖母の機嫌が悪い、

面倒だ。

母方の伯父で在方^{ざかた}で村長をしてゐた人があつた。如何^{どう}したのだから、祖母とは仲悪^{なかつた}で、死後迄餘り好くは言はなかつたが、何かの話の序^{ついで}に、阿母^{あは}さんもお祖母さんには随分泣かされたものだよ、と私に言つた事がある。成程折々母が物蔭で泣いてゐると、いつも元氣な父が其時ばかりは困つた顔をして何か密々^{ひそひそ}言つてゐるのを、子供心にも不審に思つた事があつたが、それが伯父の謂ふお祖母さんに泣かされてゐたのだつたかも知れぬ。

兎に角祖母は此通り氣難^{きづ}かし家^やであつたが、その氣難かし家の、死んだ後迄噂に残る程の祖母が、如何いふものだから、私に掛^かると、から意久地がなかつた。

四

何で祖母が私に掛ると、意久地が無くなるのだから、其は私には分らなかつた。が、兎に角意久地の無くなるのは事實で、評判の氣難かし家が、如何^{どう}にでも私の思ふ様になつて了ふ。

まづ何か欲しい物がある。それも無い物ねだりで、有る結構な干菓子^{かんかし}は厭で、無い一文菓子が欲しいなどと言出して、母に強求^{きやうきう}するが、許されない。祖母に強求^{きやうきう}する、一寸澁る、首玉^{くびたま}へ嚙^かり付いて、よう／＼と二三度鼻聲で甘垂^{あまた}れる、と、もう祖母は海鼠^{なまこ}の様になつて、お由——母の名だ

——彼様に言ふもんだから、買つて来てお遣りよ、といふ。祖母の聲掛りだから、母も不承々々起つて、雨降でも私の口のお使に番傘傾けて出掛けようとする。斯うなると、流石の父も最う笑つてばかりは居られなくなつて、小言をいふ。私が泣く、祖母の機嫌が悪い。

「此様小さい者を其様に苛めて育て、若しか俊坊の様な事にでもなつたら、如何おしだ？ 可哀さうぢやないか。」

といふのが口切で、ポツリ／＼と始める。俊坊といふのは私の兄で、私も虚弱だつたが、矢張虚弱で、六ツの時儼られたのださうだ。それも急性胃加答兒で儼られたのだと云ふから、事に寄ると祖母が可愛がりごかしに口を慎ませなかつた祟かも知れぬ。併し虚弱な兒は大食させ付ると達者になると言はれて、然うかなと思ふ程の父だから、祖母の矛盾には氣が附かない。矢張有觸れた然う我儘をさせ付けては位の所で切脱けようとする。祖母も其は然う思はぬでもないから、内々自分が無理だと思ふだけに激する、言葉が荒くなる。もう此上憤らせると、又三日も物を言はなかつた擧句、ふいと家を出て在の親類へ行つた切歸らぬといふ騒も起りかねまじい景色なので、父は黙つて了ふ。母も黙つて出て行く。と、もう二十分も経つと、私が兩手に豆振を持つて雀躍して喜ぶ顔を、祖母が眺めてほく／＼する事になつて了ふ。

斯うして私の小さいけれど際限の無い慾が、毎も祖母を透して遂げられる。それは子供心にも

薄々了解るから、自然家内中で私の一番好きなのは祖母で、お祖母さん／＼と跡を慕ふ。何とな
く祖母を味方のやうに思つてゐるから、祖母が内に居る時は、私は散々我儘を言つて、惡たれ
て、仕度三昧を仕散らす、留守だと、萎靡るのではないが、餘程温順しくなる。

其癖私は祖母を小馬鹿にしてゐた。何となく奥底が見透されるから、祖母が何と言つたつて、
些とも可怖くない。

それを又勝氣の祖母が何とも思つてゐない。反て馬鹿にされるのが嬉しいやうに、人が來る
と、其話をして、憎い奴でございませうと言つて、ほく／＼してゐる。

兩親も其は同じ事で、散々私に惱まされながら、矢張何とも思つてゐない。唯影でお祖母さん
にも困ると、お祖母さんの愚痴を零すばかり。

私は何方へ廻つても、矢張好い兒だ。

五

親馬鹿と一口に言ふけれど、親の馬鹿程有難い物はない。祖母は勿論、兩親とても決して馬鹿
ではなかつたが、その馬鹿でなかつた人達が、私の爲には馬鹿になつて呉れた。勿體ないと言は
すには居られない。

私に何の取得がある？ 親が身の油を絞つて獲た金を、私の教育に惜氣もなく掛けて呉れたのは、私を天晴れ一人前の男に仕立てたいが爲であつたらうけれど、私は今眇たる腰辨當で、浮世の片蔭に潜むでゐる。私が生きてゐたとて、世に寸益もなければ、死んだとて、妻子の外に損を受ける者もない。世間から見れば有つても無くても好い餘計な人間だ。財産なり、學問なり、技能なり、何か人より餘計に持つてゐる人は、其餘計に持つてゐる物を挟むで、傲然として空嘯いてゐても、人は皆其足下に平伏する。私のやうに何も無い者は、生活に疲れて路傍に倒れて居ても、誰一人振向いて見ても呉れない。皆素通して匆々として了ふ。偶立止る者が有るかと思へば、熟々視て、金持なら、うゝ、貧乏人だと云ふ、學者なら、うゝ、無學な奴だと云ふ、詩人なら、うゝ、俗物だと云ふ、而して匆々として了ふ。平生最も親らしい面をして親友とか何とか云つてゐる人達でも、斯うなると寄つて集つて、手手手に腹散々私の缺點を算へ立てゝ、それで君は斯うなつたんだ、自業自得だ、諦め玉へ／＼と三度回向して、彼方向いて匆々として了ふ。私は斯ういふ價値の無い平凡な人間だ。それを二つとない寶のやうに、人に後指を差されて迄も愛して呉れたのは、生れて以來今日迄何萬人となく人に出會つたけれど、其中で唯祖母と父母あるばかりだ。偉い人は之を動物的の愛だとか言つて擯斥されるけれど、平凡な私の身に取つては是程有難い事はない。